

保育者に與ふることは斯界指導者の任務でなければなりません。



大 關 二 よ

ボカボカ暖かい日ざしが、お山や砂場や花壇や藤棚や、まごもかも一ぱいに流れ渡つてゐる。子等は、伸びんこする全身の力を、思ふ存分に發揮して、嬉々々遊び廻つて居る。それは、花信しきりに傳へられる春でもよければ、落葉の錦が大地を包む秋でもよい。花に戯れる蝶々の如く、木の實を啄む小鳥の如く、その生命は自然の間に融け込んでしまつて、天地は將に一大樂園を示すものである。

かゝる時、少しお辨當を早く濟ませて、お隣の聖堂へ遠足を試みるのは、この上もない彼等の喜びである。二人づゝ仲よくお手をつないで、藤棚を通り、小學校の校舎を通り、女學校の側を過ぎるま、境の堀がある。小使に、鍵を開けてもらった、小さな門をくゞるま、そこはもう聖堂の構内なのである。徳川家康の世に天正以來の兵亂治まつて、これから世は泰平にならうとする時、まづ一國の統治は文教を興すにありま觀じ、林大學頭をして、本郷湯島臺に文教の淵源を定めしめ、孔子の尊像を安置して、精神教育の基をこゝに置きてより、幕府十五代の間、幾多の學者がこゝで思を練つた事であらう。足ひきたびこの地を踏めば、老樹亭々まして天を摩し、子等の歩む土の色は、漆黒に青い苔のむした所さへあるのである。左に進み右に折れ、古い建物の傍を過ぎるま、古色蒼然たる石段がある。幾百人の學生に、踏み固められた石の一つ一つは、土の中に半ばうつもれて、草なぎ生えて居り、角も丸みてあれば、子等の歩むにも、些の危険もない。段を登るま又門がある、質素な黒い作りではあるが、正面遙かに聖廊を拜しては、何まなく敬虔の念が湧く。然し子等には、そんな連想は一つもないのは勿論である。

「先生ドングリが落ちてゐますよ」

「こゝにもあつた」

こゝいふ場合、先生が一步でも立ちおくれようものなら、子供はバツミ飛び散つてしまふのである。而しもう目的の所へ来て居るのであるから、引きしめておく必要はない。

「おゝ、ドングリがいくつもありますね、〇〇さんにも先生が見つけてあげませう一緒にいらつしやう」。

「先生これ何ですか」

「それはドングリのはいつて居たおわんです」

「お帽子のやうですね」

「そうそうドングリのお帽子の様ですね」

「先生これ何の葉？」

「それはいつての葉ですよ」。

秋の收穫は何も云つても豊富であるが、夏は又バッタ、蜻蛉、なご蟲狩が相當に出来るので、男の子のおよろこびであるし、春の草花は、女の子のまゝ事の材料が、無數に得られるのも有り難い。

「私赤まんまをみるの」

「私はきうり」

「私ねぎよ」

「先生これ何でせう」

「それは猫じやらしでね、こつやつて動かす猫がじやれますよ」

「先生おうちに猫みますよ」

「おうちにもゐます」

「うちの猫ゆべねずみこつたのよ」

聖堂は決して華やかな公園ではない。楽しい遊戯場ではない。それでも子等は時のたつのを忘れて、新しい経験によろこぶのである。

「もつそろそろ歸りませうか」

「ええ」。

「じやです」

「もつこりたいの」

「ええ、いいふ子供の柔順さも」もつこ居たい」云ふ子供の熱心さも」もつこ採收したい」いいふ子の努力家も、皆將來何物にか役立つべき、素質の一人だと思へば、大人は、決してこの尊い芽生えのひらめきを、折つてはならない。地に下された種子が、始めて萌え出た時、さうしてその芽を踏むこぎが出来やう、培ひ水そゞぎ、朝早く見舞つては、昨夜の中に害虫の侵すこぎはなかつたかき調べ、夕方には、風雨のさわり水の不足がないかき、尋ね度いのは人情である。この尊い芽生えのやうな幼児の、誰もの氣持をさうかして生かさねばならない。

「あゝあそこのお屋根に鳩ポッポが居ますよ」歸らうこ賛成した子等は、見事にこの鳩の方へ興味を轉じてしまった。鳩ポッポくゞき、日頃口ずさむ、お唱歌は自然に、子供の口から湧いて来る、飛び去るもの、飛び来るもの、二羽になり三羽になり、五、六、七、八、屋根の上は鳩のダンス場である、あれがお母さまの鳩、あれが子さまの鳩、赤ちゃんがおん

ぶしてゐる、なほ盛に想像の翅は擴つてゆく。

「先生こんなにはひろひました」。

採集家のポケットは両方とも一ぱいである。

「さあそれちや歸りますよ」。

もこ来た途をもこの様にしづかにく歸るのである。



野 間 こ よ

私が明治四十一年の春以來十三年の間お茶の水幼稚園に御厄介になりましたのは十數年昔のころでございます、長くも感ぜられ短くも感ぜられる此十三年、やはりいろいろの事がございました、妹も弟も持たぬ私は子供が大好きではありましたが、これに對して何等の經驗も持たず、はじめて四十人の子供を受持ちました時には全くさうしてよいか分りませず子供に口利くのも恥かしい氣がしました、でも他の先生がたの御親切なお導きのもこに其日其日を子供に怪我もさせず一しよに楽しく遊んで行くこが出來ました。樂しかつた思ひ出も苦しかつた思ひ出も數々ありますがこには其當時の保育の片はしを一つ二つ覺束ない記憶を辿ながら記して見たいと思ひます。

まづ朝子供が集まりました頃、保育室に入れ各兒の定まつた椅子に腰かけさせて後、手を洗はせたり、鼻をかませたり、爪を調べてやつたり、整容に關する種々の事をします。

整容が終りますも先生も子供も全部遊戯室に集まり半圓に並び當番の先生が中心に立ち「お早うございます」朝の挨拶をしてあみ二つ三つ唱歌や遊戯をして終ります。時には其時々簡単なお話もいたしました。